

人間性の探究

第8回

イギリス植民地支配と英領マラヤ

2020年度前期

1

(1) イギリス東インド会社の進出とシンガポールの建設

* イギリス東インド会社(East India Company)

- ・ 1600年：ロンドンの商人が、インド以西のアジア各地との貿易を独占するため、エリザベス1世の特許を得て設立、1601年からアジア貿易を開始
- ・ 当初の目的は貿易による利益追求 (→のち18世紀中頃～徴税権・行政権をもち統治を行う機関へ変質)
- ・ 1 航海ごとに資金を集める形態(⇔オランダ東インド会社)
- ・ 「アンボイナ事件」(1623)※を契機に東インドの香辛料貿易から撤退
 ※オランダ人の要塞内のイギリス商館員によるオランダ人襲撃計画が「発覚」
 →拷問による自白→英国人・日本人各10名、ポルトガル人1名が死刑
- ・ 1684年：オランダに押され、西ジャワのバンテンからも撤退

⇒以後、イギリス東インド会社はインド経営を主力とするようになる

2

2

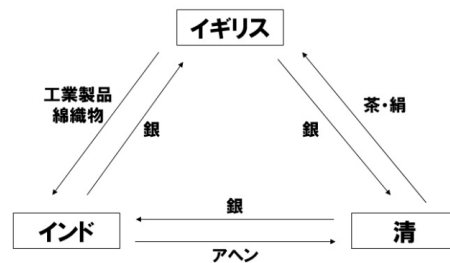
* イギリス東インド会社の三角貿易（19世紀）

- ・ 18～19世紀にイギリスで茶の需要が増大

→中国貿易の拡大(=インド-中国-イギリスの「三角貿易」)

⇔17～18世紀の「大西洋三角貿易」

(ヨーロッパ-アフリカ大陸-アメリカ大陸/西インド諸島)



→中国への中継地としての東南アジアの重要性の高まり

3

3

※当時のイギリスの東南アジア拠点とは、西スマトラ・ベンクーレン(現ベンクル)のみ

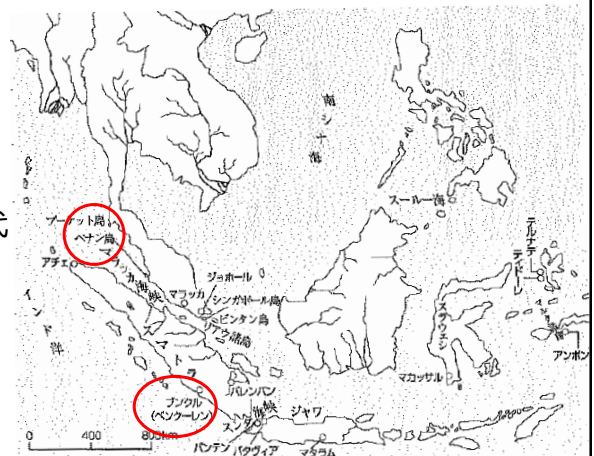
(マラッカ海峡経由×、スンダ海峡経由×)

- ・ 1786年、イギリスはペナンを獲得

...元海軍軍人・商人フランシス・ライトが現地支配者(マレー王権クダのスルタン)と交渉

...ビルマの南下に悩まされていたクダは、イギリス東インド会社の海軍力による保護を得る代わりにペナンを割譲

(実際には、ライトの口約束)



4

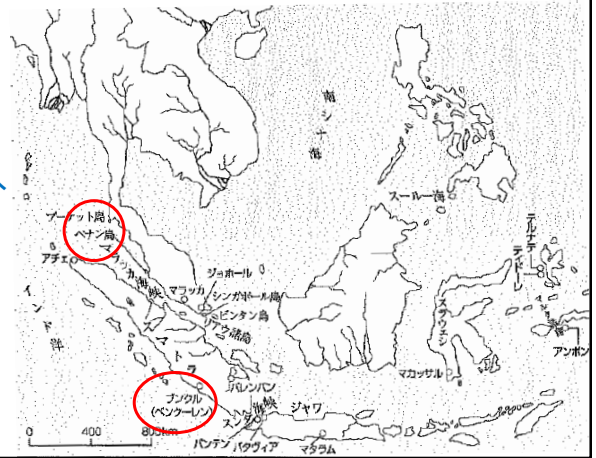
- ・イギリスはペナンを獲得するも...

ペナンを自由港としたため関税収入なし、航路からはずれ、船舶用木材も調達できず

- ・一時占領したジャワ(1811-1816)もオランダへ返還

→新たな中継港を獲得する必要

→ラッフルズによるシンガポール建設へ

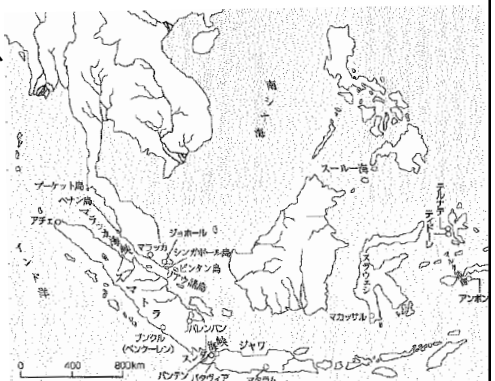
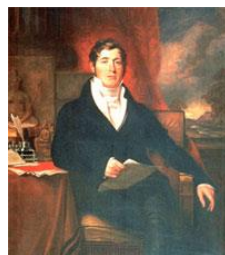


5

* 「シンガポールの建設者」ラッフルズ(Thomas Stamford Raffles, 1781-1826)

- ・ 1781年、中米ジャマイカ沖の船上で生まれる。父はイギリス商船の船長
- ・ 14歳のころイギリス東インド会社の臨時社員、19歳で正社員となる
- ・ 1805年(24歳のとき)、書記兼マレー語翻訳官としてペナンに赴任(船上でマレー語を修得)、2年後には第一級書記官に昇進
- ・ ジャワ副総督就任(1811-1816)※、帰国しナイトの称号を授与(1817)、ベンクーレン副総督に就任(1818)、シンガポール獲得(1819)、帰国(1824)
- ・ 1826年、44歳で死去

※土地改革や行政改革の実施、
『ジャワ誌』(1817)刊行



6

* 「シンガポールの建設者」ラッフルズ

- ・ アダム・スミス流啓蒙主義者として、オランダの重商主義的植民地統治を批判、奴隷廃止論者
- ・ 独学でマレー語を習得、現地の慣習・自然・歴史などへの高い関心
(ジャワ・ボロブドゥール遺跡の再発見、ラフレシアの「発見」)
- ・ インド総督ミントー卿による理解とサポート



7

* ラッフルズによる自由港シンガポールの建設の経緯

- ・ 1818年：ベンクーレン副総督に就任
- ・ ペナン～マラッカにつながる貿易港としてマレー半島先端にある島の一群を探索し、シンガポール島に目をつける

※当時のシンガポールの状況

- ・ 無名に近い、人口300人ほどの漁村
- ・ 14世紀には周辺海域の拠点港市として発展するも、1511年にマラッカを占領したポルトガルにより破壊され、海賊の根拠地となる(海の民「オラン・ラウト」による交易支配)
- ・ 19世紀初頭は、ジョホール王家(マラッカ王家の後継)の傍流にあたる「トゥムングン」が支配

8

8

* ラッフルズによる「合法的」なシンガポール獲得の経緯

- ・ 1819年初め：ラッフルズはシンガポール川の河口付近に上陸。ここにオランダ人がいないことを確かめる
- ・ この地の部族の長「トゥムングン」を通して、ジョホール王国の後継争いに敗れて貧しい生活を送っていたテンク・フサインをシンガポールに招き、ジョホール王国の正統なスルタン(王)として擁立する※

※当時、この地域を支配していたジョホール王国の王スルタン・マホメット・シャーの死後、王の実子である兄と弟の間で後継者争いが起こった。国王は生前、後継者として兄テンク・フサインを推薦していたが、結局、副王の陰謀によって弟のテンク・アブドゥル・ラーマンが即位した。

※弟テンク・アブドゥル・ラーマンの背後には、オランダの勢力あり

9

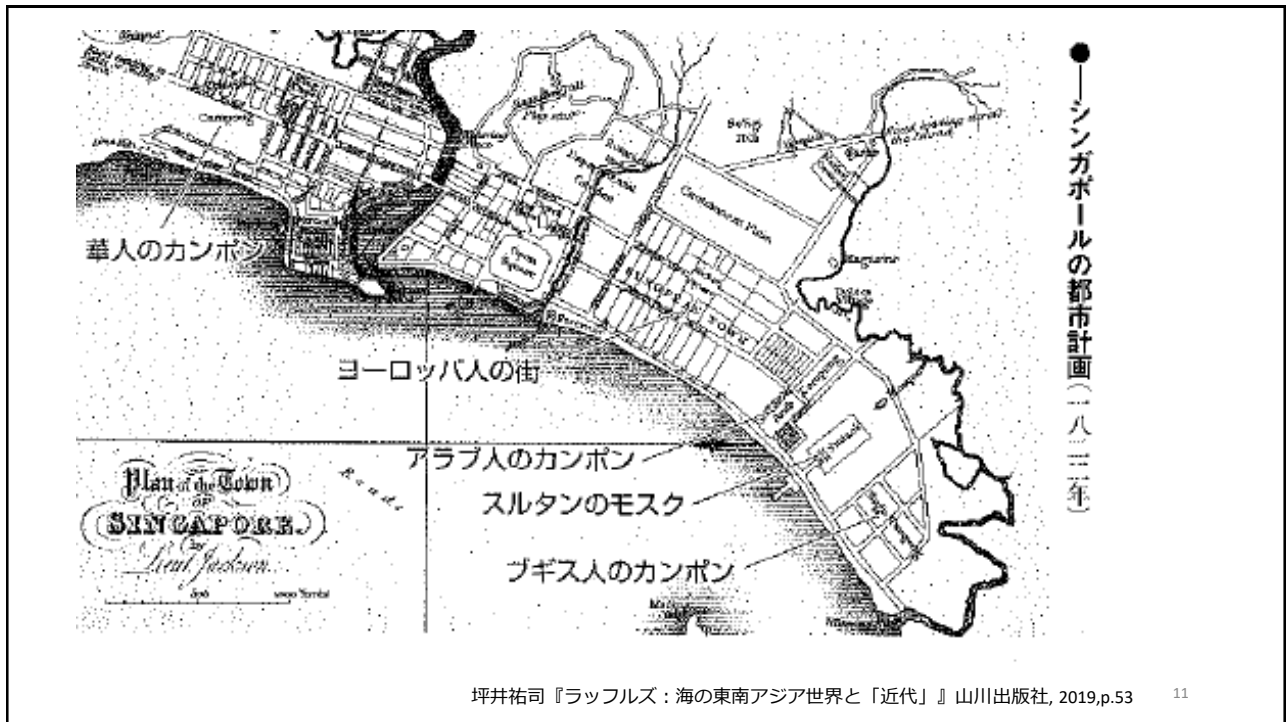
9

* ラッフルズが新しいスルタン(テンク・フサイン)と結んだ条約(1819)の内容

- ①イギリス東インド会社は、スルタンに対し、毎年5千スペインドルを支払い、あわせてスルタンの保護を保障する。
- ②地元の首長トゥムングンには3千スペインドルを支払う
- ③スルタンとトゥムングンは会社の商館を侵害する敵から会社を守るための支援を行うことを約束する
- ④スルタンとトゥムングンは他のいかなる国家とも条約を締結せず、自己の領土内に植民地を建設する許可を与えないことを約束する
- ⑤シンガポール港はイギリス官憲の直接支配下におかれ、その規則に服する
- ⑥徴収されるべき関税の半分はトゥムングンに与えられる

10

10



11

民族など	男	女	計
ヨーロッパ人	243	117	360
ユーラシアン	472	450	922
アルメニア人	35	15	50
アラブ人	121	73	194
バリ人	78	71	149
パウエアン人	720	43	763
ブギス人	1,452	811	2,263
非イスラム原住民	1	2	3
華人	25,749	2,239	27,988
コーチシナ人	11	16	27
ジャワ人	1,139	510	1,649
ユダヤ人	18	4	22
マレー人	6,612	5,594	12,206
インド人	5,423	838	6,261
バルシー	23	0	23
シャム人	4	1	5
計			52,891
兵士			609
罪人			1,548
船上生活者			2,995
居住地不明			1,000
合計			59,043
			(人)

●シンガポールの人口（一八四九年）

坪井祐司『ラッフルズ：海の東南アジア世界と「近代」』山川出版社, 2019, p.71

12

12

ラッフルズ最後の訪問時(1823年)のシンガポール



[白石2000:30-31] 13

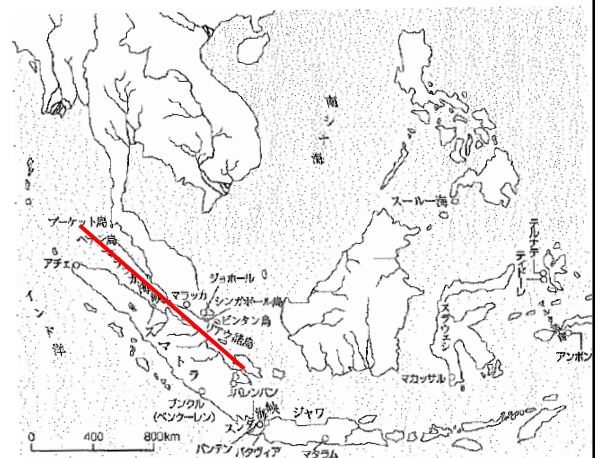
13

※その後の動き...

・ 1824年：英蘭条約により、イギリスはマラッカを獲得(ベンクーレンと交換)
→マラッカ海峡を境界とし、マレー半島側はイギリス領、スマトラ島側はオランダ領となる(植民地分割線の確定)

・ その後シンガポールは、
政治・経済・軍事のすべての面において
イギリスの東南アジアの拠点となる

※この頃にはすでに会社の性格は、当初
の「貿易による利益を追求する一商社」
から、「支配領土の統治機関」へと変貌
していた



14

(2) イギリス植民地支配と「複合社会」の形成

* イギリス東インド会社の解体

<背景>

イギリスでは、18世紀後半に始まる産業革命の後に自由主義が台頭し、自由主義的な内政改革とともに東インド会社の貿易独占権に対する非難が強まる

→東インド会社はインド貿易および中国貿易での独占権を失い、インド大反乱(1857)の鎮圧後の1858年に解散

→以後インドをはじめとするアジアの領土はイギリス政府の直接支配下におかれる

15

15

* イギリスによる英領マラヤ支配のしくみ

※「英領マラヤ」=現在のマレーシアのうちのマレー半島部分+シンガポール

⇔「英領北ボルネオ」=現在のマレーシア・サバ州、「サラワク王国」(ブルック王国)=現在のマレーシア・サラワク州

※イギリス植民地支配の当初の方針=「不干涉政策」

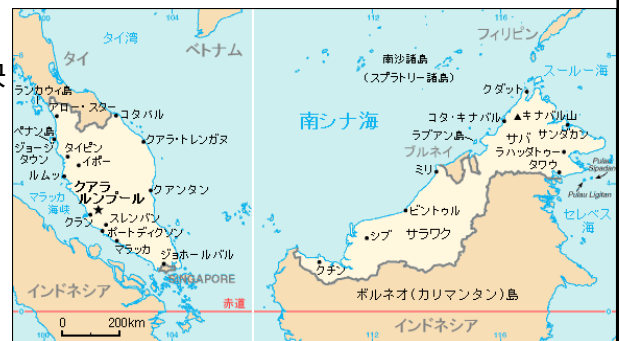
→しかし、のちに「干渉政策」へ転換

...王位継承や中国人秘密結社間の内紛の解決

のため、1875年パンコール条約を締結

→行政官(「理事官」)の設置へ

(※しかしあくまで「消極的」干渉)



16

* イギリスによる英領マラヤ支配のしくみ

・海峡植民地(Straits Settlements)

...シンガポール、マラッカ、ペナン(対岸のウェスリーを含む)

...イギリス人総督が直接統治

・マラヤ連合州(Federated Malay States)

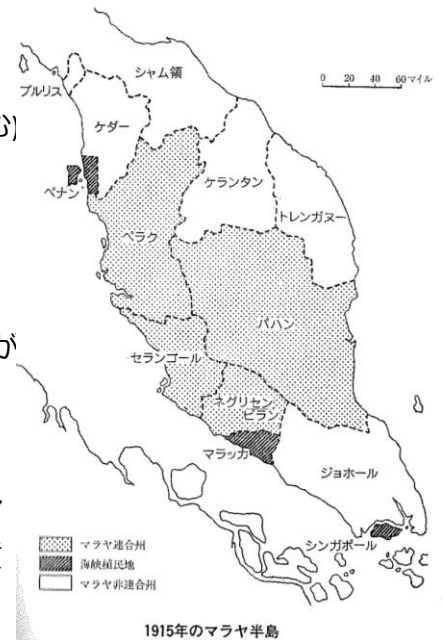
...ペラ、パハン、ヌグリスンビル、セランゴール

...イギリスの保護領。名目上は現地の王(スルタン)を有するが宗教・慣習以外の行政権はイギリス人知事がもつ

・マラヤ非連合州(Unfederated Malay States)

...ブルリス、ケダー、クランタン、トレガンヌ、ジョホール

...イギリスの保護領。イギリス人顧問の指揮を受ける。性質はマラヤ連合州と基本的に同じだが、連合を組織しない



鶴見良行『マラッカ物語』時事通信社, 1981, p.280

17

17

* 移民の流入と「複合社会」の形成

・錫鉱山の大々的な開発(19世紀半ば～)

→中国系労働者が大量流入(福建人、広東人、客家など)

・コーヒー・茶・砂糖プランテーションの開発(19世紀半ば～)、ゴム農園の開発(20世紀初頭～)

→インド系労働者が大量流入(タミル人など)※

※初期のインド系住民は警察官や植民地下級官吏などとして働く(←勤勉なインド人が好まれた?)

⇒「複合社会」の形成

18

18

* 「複合社会」 (plural society)

...イギリスの植民地官吏ファーニバルの唱えた植民地構造の特色

...現在までつづくマレーシア社会の特徴を表す概念

...「一つの政治単位のなかで隣り合わせに生活していながら、お互いに混じりあうことのない二つないしそれ以上の要素または社会秩序を内包するような社会」

...「敵意もないが関心もない」「かれらは混じり合うが、結びつかない」

- ・マレー系住民：農村部で農業に従事
- ・中国系住民：商業、鉱業(錫)、農業、一般使用人
- ・インド系住民：大半がゴム栽培業

19

19

表2 英領マラヤの人口構成の変容
(1835-40~1931)

	マレー系	中国系	インド系
1835-40	88%	8%	4%
1884-91	65%	30%	5%
1921	50%	36%	14%
1931	45%	40%	15%

出典：白石隆「第V章 国民統合をめぐる」大林太良編『民族の世界史6 東南アジアの民族と歴史』山川出版社，1984。上の数字はシンガポールを含むこと，三大民族間の百分比であることに注意。

綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいマレーシア』弘文堂，1994，p.82,90

表5 マラヤ連邦州のセンサスにおける民族分類 (1911)

<u>I. ヨーロッパ系住民</u> (17 サブカテゴリー)	<u>V. インド系住民</u> タミル テルグ パンジャブ ベンガル マラヤリ ヒンドゥスタン アフガニスタン グジャラート マハラッタ ビルマ その他のインド系
<u>II. ユーラシアン</u>	<u>VI. その他の住民</u> アフリカ アンナン(安南) アラブ アルメニア フィリピン 日本 ユダヤ シャム シンハラ 不明
<u>III. マレー系住民</u> マレー ジャワ サカイ パンジャール ボヤン(バウエアン) メンデリン(マングヒリン) クリンチ ジャンビ アチェ ブギス その他	<u>IV. 中国系住民</u> 広東 客家 潮州・客家 福建 興化 福州 潮州 海南 広西 その他

20

20

表3 西マレーシアの中国系住民の
方言集団別人口統計 (1980)

	人 口	%
福建(Hokkien)	1,333,946	36.7
広東(Kanton)	692,520	19.1
客家(Khek)	789,686	21.7
潮州(Teochew)	447,370	12.3
海南(Hainan)	140,429	3.9
広西(Kwongsai)	81,815	2.3
福州(Hokchin)	68,736	1.9
福清(Hokchia)	6,515	0.2
興化(Henghua)	11,982	0.3
その他の中国系	57,543	1.6
計	3,630,542	100.0

出典：1980 *Population and Housing Census of Malaysia, General Report of the Population Census Volume 2*. Kuala Lumpur : Department of Statistics Malaysia, 1983.



図2 中国人出身地略図

綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいマレーシア』弘文堂,1994,p.87

21

21

表4 西マレーシアのインド系住民の
出身地別人口統計 (1980)

	人 口	%
インド・タミル	925,443	85.1
マラヤリ	34,864	3.2
テルグ	26,113	2.4
シク	32,684	3.0
その他のパンジャブ	5,148	0.5
その他のインド系	32,118	2.9
パキスタン	9,898	0.9
バングラデシュ	787	0.1
スリランカ・タミル	17,421	1.6
その他のスリランカ	3,080	0.3
計	1,087,561	100.0

出典：1980 *Population and Housing Census of Malaysia, General Report of the Population Census Volume 2*.



図3 インドとスリランカの主要言語分布

綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいマレーシア』弘文堂,1994,p.88

22

22

表6 サバの主要民族別人口(1980)

	人 口	%
プリブミ	838,141	82.9
中国系	163,996	16.2
インド系	5,613	0.6
その他	3,296	0.3
計	1,011,046	100.0

表7 サラワクの主要民族別人口(1980)

	人 口	%
マレー系	257,804	19.7
メラナウ	75,126	5.7
イバン	396,280	30.3
ビダユ	107,549	8.2
その他の原住民	69,065	5.3
中国系	385,161	29.5
インド系	3,328	0.3
その他	13,269	1.0
計	1,307,582	100.0



綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいマレーシア』弘文堂,1994,p.96

23

23

(3) イギリス植民地支配と教育

*「複合社会」英領マラヤの教育

・イギリスの不干渉政策→初期の近代教育は民間(とくに宣教師)によって担われる

...設置・運営母体はロンドン・ミッシヨナリー会、ローマン・カトリック修道会、フランス外国宣教会、アメリカ・メソジスト教会など

・都市部に集中

・エリート英語学校として、植民地支配に必要な下級官吏・書記・通訳を育てる

(植民地政府による助成あり)

・一部は女子校も設置(ex.ペナン・フリー・スクール)、母語学校(マラヤ学校、タミル学校など)も併設

・あらゆる人種に開放(初期はヨーロッパ人子弟が中心)、貧しい者には無償で教育

<学校の例>

チャイニーズ・フリー・スクール(マラッカ,1815)、マラッカ・フリー・スクール(1816)

ペナン・フリー・スクール(1816)、シンガポール・インスティテューション(1823)など

24

24

※英語学校への各住民の反応

- ・マレー系住民

...キリスト教への抵抗感から、消極的な態度

- ・中国系住民とインド系住民

...英語教育の経済的価値を認識し、子弟を積極的に英語学校へ通わせる
(英語 = 支配者の言語)

25

25

* イギリス植民地政府の教育についての考え方

【初期】：西洋式教育の推進に消極的態度/無関心

- ・ムスリムの反発を恐れて、英語教育(=布教)を禁じる(マレー系住民に対して)
(⇔マレー人独自の教育：ポンドックでのクルアーン学習)
- ・英語教育の急速な発展を危惧し、抑制しようとする(中国系・インド系住民に対して)

【第一次大戦前後】：マレー人に対して積極的な介入政策へ転換、民族別の教育制度

- ・4系列の学校...英語学校、マレー語学校、華語学校、タミル語学校
 - ・「視学官」制度(1872年～)
- ...官立学校と私立学校を区別、マレー語学校のみ全面的に助成(他は部分的)

26

26

表2 マレー連邦州における各種学校の在籍生徒数（1931年）

		在籍生徒数	
		男子	女子
マレー語学校		35,290	5,118
華語学校		14,394	4,488
タミル語学校		10,656	
英語学校		13,169	4,875
英語学校の生徒の 民族別内訳	マレー人	2,525	222
	華人	6,252	2,710
	インド人	3,707	1,284
	ヨーロッパ人およびユーラシアン (欧亜混血者)	576	492
	その他	109	167

出典 AREFMS 1931: 76, 88, 89, 90.

左右田直規「植民地教育とマレー民族意識の形成-戦前期の英領マラヤにおける
師範学校教育に関する一考察」『東南アジア 歴史と文化』(34), 2005, p.6

27

27

* マレー人の教育

・ 階層に応じた2系統の教育システム

...①大半の農漁民の子弟にはマレー語初等教育のみ、②王族・貴族の子弟の男子には、さらに中等段階以上の英語教育を認める

...1904年義務教育法令(7～14歳のマレー人男子対象)、マレー語初等学校ではとくに農村教育を重視

28

28

表1 マレー連邦州におけるマレー語学校数の推移（1901～1931年）

	1901		1911		1921		1931	
州	男子校	女子校	男子校	女子校	男子校	女子校	男子校	女子校
ペラ	98	12	140	41	174	43	212	62
スランゴール	33	2	47	2	61	7	77	10
ヌグリ・スンビラン	27	0	59	3	67	4	81	8
パハン	13	0	30	0	49	2	80	5
合計	171	14	276	46	351	56	450	85

出典 AREFMS 1901: 2-6;1911: 1-2;1921: 19;1931: 88.

左右田直規「植民地教育とマレー民族意識の形成-戦前期の英領マラヤにおける師範学校教育に関する一考察」『東南アジア 歴史と文化』(34), 2005, p.6

29

29

*イギリス植民地政府にとっての「望ましいマレー人」像

・「無差別に英語を教えようとする危険を避けるべきである。ごく少数の学校以外では英語を教えるわけにはいかない。農民の子供に対して、かれらの生活の本分に適さず、むしろ肉体労働のようなことに不満を抱かせてしまうような、言語〔英語〕の無駄な知識を与えるべきだとは思わない。

・現在、大半のマレー人少年少女にはかれら自身の言語〔マレー語〕を学ぶ機会がほとんどない。もし、政府がかれらに、かれらの言語やコーラン、それに算数や(特にマレー半島やマレー諸島の)地理に関する事柄を教えれば、その知識や、毎日学校に通うことで得られる勤勉、時間厳守、服従といった習慣は、かれらにとって重要な利益をもたらすだろうし、どんな職業であれ生計を立てる手助けになるだろう。後で実現不可能だとわかるようなイギリス思想の生半可な知識を詰め込まれた場合よりも、かれらはより良き市民、より有用な社会の一員となるだろう。」

(1890年のペラ州理事官スウェッテナムの報告)[左右田2005:7-8]

30

* イギリス植民地政府にとっての「望ましいマレー人」像

・政府の目的は、教育水準の高い青年たちを少数育成することでもなければ、それよりは教育水準の劣る青年たちを多数養成することでもない。むしろ、政府の目的とは、人民の大多数を向上させ、漁民や農民の息子を、彼の父よりも賢い漁民や農民にしてやり、自分の人生の運命がいかに身の回りの生活設計と合致しているのかを教育を通じて理解できるような人間に仕立て上げることである。

(マレー連邦州事務次官マックスウェルによる1920年の報告) [左右田2005:8]

31

31

まとめ：植民地教育政策の意図と、政策がもたらした結果

① 初歩的な知識や技能を備えた農民を育成する必要

...「先住民」であるマレー系住民の多くは農村部で農業に従事していたことから、マレー人に対して食糧生産者としての役割を期待(「賢い農民」)

(※イギリス植民地政府とマレー人の伝統的支配層の利害一致)

② 社会秩序を維持する必要

(⇒英領インドでは英語教育を重視した結果、中間層が台頭→反植民地運動・民族運動へ)

③ マレー人の伝統文化(「マレー人らしさ」)を「保持してあげたい」というイギリス人のロマンティシズム

⇒こうした教育政策の結果として、

農村部のマレー人と、都市部の華人・インド人との間の社会的・経済的格差が増大

⇒マレー人の不満が高まり、独立後マレーシア社会の課題となる

32

32

参考文献

- アブドゥッラー著『アブドゥッラー物語：あるマレー人の自伝』（中原道子訳）平凡社,1981
- 綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいマレーシア』弘文堂,1994
- 綾部恒雄・永積昭編『もっと知りたいシンガポール』弘文堂,1982
- 梅原悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史体系6 東南アジア教育史』講談社, 1976
- 左右田直規「植民地教育とマレー民族意識の形成--戦前期の英領マラヤにおける師範学校教育に関する一考察」『東南アジア 歴史と文化』(34), 2005, pp.3-39
- 坪井祐司『ラッフルズー海の東南アジア世界と「近代」』山川出版社, 2019
- 信夫清三郎著『ラッフルズ伝ー東南アジアの帝国建設者』平凡社, 1968